

Sport
Godzilla®

スポーツ ゴジラ

第 50 号

特集
美とスポーツ

無料



スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が
商標使用の許諾を受け、スポーツネット
ワークジャパンが発行しています。

2 第50号を発刊するにあたり

長田 渚左

■特集■

美とスポーツ

五輪三大会で金8個を含む
12個のメダルを獲得した—— 加藤澤男

4 パートⅠ 秘策の練習

取材・構成
長田 渚左

12 パートⅡ 美の秘策

取材・構成
波多野 圭吾

18 消えた電光掲示板—— 具志堅幸司

取材・構成
阿部 雄輔

25 世界で『最優秀審判賞』を獲得—— 石崎朔子

取材・構成
長田 渚左

31 信念で見る技術と表現—— 平松純子

取材・構成
山内 亮治

36 きりっとした姿勢が美人の源—— 中村多仁子

取材・構成
長田 渚左

41 忘れ得ぬ東京の名花—— ベラ・チャスラフスカ

取材・構成
長田 渚左

47 夢劇場『馬』No.23「身震い」

長田 渚左

48 バックナンバーのご案内

【表紙イラスト】 南 伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

第50号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



2020年から2021年へ暦は進んだ。こよみしかし、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大は、依然として予断を許さない状況が続いている。

ワクチン開発は世界中で進んでいるが、まだ不明な点も少なくない。毎日発表される感染者数や病床数には、明日はわが身か……といった不安を重ねながら見てしまう。そんな、つい暗くなりがちな巣ごもり生活の中、美を感じる、あるいは美しいものへの想いをめぐらす時間がめつきり減っていることに思い当たった。

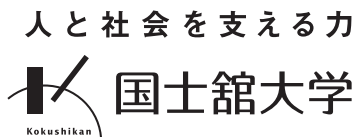
美しいものを見たい、美しいと感じたい……人間の心底にある欲求を踏まえて、記念すべき50号を構想してみた。スポーツの中にはスピードやパワーとともに、美を感じさせる要素がたくさんある。

そして、動作や動きそのものの美しさに心を奪われるということは、何と素敵なことだろうと改めて思う。

例えば東京五輪の33競技のうち、採点競技は8つもある。体操、新体操、飛び込み、馬場馬術、サーフィン、空手の形、アーティスティックスイミング、スケートボード。そして冬季五輪競技のフィギュアスケートも冬の華として絶大な人気を誇っている。
『美』もスポーツの価値の一つであることを忘れてはもつたいない。

いろいろと想いめぐらせている折に、五輪で金メダル8個を獲得し、『美しい体操』の代名詞とされた加藤澤男氏が文化功労者に選ばれた。そこで、あの時期『無口』が代名詞でもあった彼に、インタビュすることを思い付いた。『極める美』をさまざまに集めた50号です。コロナ禍での取材、編集は不自由を強いられましたが、その分、皆様にお楽しみいただければ幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



立ちどまらない保険。



三井住友海上

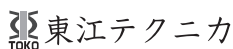


公益財団法人
住友生命健康財団



株式会社東美物流

日本ハンドボールリーグ機構



(順不同)

美とスポーツ

五輪三大会で金8個を含む
12個のメダルを獲得した

パートI 秘策の練習——加藤澤男

取材構成 長田渚左



加藤澤男 (かとうさわお)

1946(昭21)年10月11日、新潟県五泉市生まれ。中学生のときに体操を始める。新潟南高校で国体、インターハイ出場。東京教育大学(現筑波大学)4年の1968年メキシコシティオリンピックに出場したのをはじめ、72年ミュンヘン、モントリオールに出場し、団体、個人総合、床、平行棒で金メダルを獲得。追及した美は「体操の教科書」と称えられた。日本人最多金メダリスト。1999年5月国際スポーツ記者が選ぶ「20世紀を代表する25選手」に日本人で唯一選出された。筑波大学・白鷗大学名誉教授。2020年文化功労者に選ばれた。

写真△1968年メキシコシティ大会。美しい脚線美に見とれた人が多かったが……

——2020年11月、文化功労者に選ばれたことは明るいニュースでした。ご自身では、いかがでしたか？

加藤 スポーツの競技のように人前で何かをやつて、その結果いただくものとは異なり、過去からさかのぼって顕彰けんしょうされたもので、『やった！』という実感は薄いのですが、発表されるやいなや、あちこちから連絡がきて、皆さんが喜んで下さったのでうれしかったですね。幼稚園時代の友達からも電話をもらいました。携帯や家の電話が鳴りやまなかったのには、本当に驚きました。

——68年メキシコシティー、72年ミュンヘン、76年モントリオールと五輪三大会で日本人最多金8個を含む12個のメダルを獲得。さらに加藤さんの演技は「美しい体操」の代名詞とも言われてきました。ご自身が「美」について意識されたのはいつ頃からでしたか？

加藤 難しい質問ですが、思い起こしてみると、

10歳上の兄が新潟大学で美術を専攻していたので、家でもよく絵を描いていました。兄には「あっちへ行つてろ」と言われていたと思うのですが、僕はちよろちよろして、何か見聞きしていたんでしょう。小学校に入学する頃には遠近法とかも聞きかじって知っていました。薄い金箔きんぱくを扱う様子なども見ていて面白くて……美とは言い切れないのですが、芸術的なものが家の中にあつたようです。

——体操を始められたきっかけは？

加藤 本当は野球をやりたいかった。花形ですからね。でも2番目の兄が中学、高校でエースピッチャーで地元では知られていたので、あの加藤の弟か?!と言われるのが嫌だったんです。中学に入つて、幅跳びの予定なのに、なぜか砂場で鉄棒をすることになった日がありました。その授業が終わつた後、教員室に呼ばれて『体操部に入らないか』という話になったのです。

――抜群に鉄棒が上手だったのですね。

加藤 いやあ、そんなことはなかった。蹴上がり
ができなくて、何度も何度もやった記憶があるく
らいだから（笑）。今思うと、新潟で開催される
国体の要員を探していたのでしょうか。その路線に
乗ったということになります。

――その後、新潟南高校で国体、インターハイに
出場して、東京教育大学（現筑波大学）に進学さ
れました。体操の名門ですが、成績はいかがでし
たか？

加藤 3年までまるで駄目でした。1年生は仕事
が多くて、鉄棒の下に敷くおがくずをスコップで
ひっくり返す作業があります。スコップを洗って
いたら、トランポリンの鉄棒が倒れてきて、右肘
関節の中の骨が欠けてしまったのです。その骨が
引っ掛かって腕が伸びなくなりました。4、5、6月と
イライラしてすごし、夏に手術しました。その後
も伸ばすのも曲げるのも怖くて、冬までかなり影

響がありました。その頃ですよ、練習ができない
ので体育館の入り口に座って、いつも先輩が入っ
てくる度に「こんにちは」と挨拶していたら、あ
る先輩に「何だ、お前は番犬か！」と言われたの
です。いくら僕が成年（いぬ）だからと言って、それはな
いだろうと悔しくて……。

――座っていたくて、そうしていた訳ではないの
に悔しかったと思います。一方で先輩たちの練習
をずっと見ていたことで『見取り稽古』のような
時間になっていたのかもしれないね。その後の
加藤さんの体操の美しさには定評がありました。

加藤 いやあ、脚については高校の時の国体の前
に、ソ連のトップ選手の演技会を見る機会があつ
て、心底驚きました。我々モンゴル系の人の脚は
O脚で、外足が骨格から外に出ているような形な
のに、ソ連選手の脚は両脚がピタッとまるで万年
筆のペン先のようにそろう……あまりの違いに愕（がく）
然（ぜん）となりました。

——ちなみに加藤さんの脚は？

加藤 立派なモンゴル系のO脚です（笑）。

——へえ?! ですがつり輪での十字懸垂など、世界中が加藤さんの美しい脚技に魅了されていましたよ。（P4写真①）

加藤 まあ隠すのに苦労していました。カバーしなきゃならなかった。膝を伸ばして、その膝を中に入れる状態にして、脚と脚を合わせた間にすき間ができないように外にひねる……人様にすすめられないですけど、日常茶飯事、氣にして脚を伸ばしていました。

——人知れず努力をして、大学4年でメキシコシティー五輪を迎えるわけですね。3年のときのプレ五輪では8位でしたが、大会本番では個人総合で金メダルを獲得しました。ソ連のエース、ミハイル・ポローニンが首位にいましたが、2位につけていた加藤さんは0・35もあつた差を逆転しました。普通なら覆^{くつがえ}せない差です。

加藤 2年前の世界選手権で優勝したポローニン

選手が、金メダルの本命と見られていました。でも決勝で硬くなったのか、最終種目のあん馬で把^と手に足を引つけたのです。

——加藤さんの最終種目は床でした。するとポローニンの失敗を見てから演技に入ったのですか？

加藤 僕は小心者だからライバルの演技なんて見ない。ところが、あのときはたまたま見えてしまった……。

——はあ、ではそのポローニンの考えられないミスを目撃して、追い風だと感じて「よし、やるぞ」と気合がこもったのですか。

加藤 いやあ、そんなふうに心は動かなかった。目前に床の演技が迫っていて、自分の演技に集中するだけだ……としか思わなかったですよ。

実はこのメキシコシティー大会の2カ月前に、

共産圏のソ連を中心としたワルシャワ条約機構軍が、チェコスロバキアに侵攻した。『プラハの春』と呼ばれたチェコスロバキアの自由化改革運動を同軍が蹂躪^{じゅうろう}したことで、国際世論は大きく反ソ連へと傾いていた。ボロニンに罪はないが、あの大国ソ連の絶対的なエースに、日本の無名選手が大番狂わせを起こすのでは……体育館には大観衆のそんな期待も膨らんでいたのかもしれない。

加藤は床の対角線を走った。前転から後転、宙返りでひねり、前後に開脚して着地。前後開脚座……ゆつくり倒立、向きを変えて後転跳び、さらにY字バランス、そして連続の前転から後転回転、伸身の一回ひねり、最後に後方宙返りの伸身ひねりを決め、寸分の乱れもなく着地した。体育館は嵐のような大歓声に包まれた。

床の主任審判員はソ連のムラトフだった。加え

てキューバ、ブルガリア、西ドイツ、日本の4人の審判がいた。キューバが9・80、それ以外の3人は9・90を出した。採点は一番高い点と低い点を引き、平均を出す。加藤の得点は9・90になると推察された。そのとき、ソ連のムラトフが最後の抵抗を見せた。4人の審判を集めたのだ。彼は一人一人にそれぞれの主張を尋ねた。キューバ以外の共産国であるブルガリアの審判の動向が注目された。長い長い意見交換が続いた。しかし、ついに得点変更には至らなかった。

『サワオ・カトウ 9・90』。電光掲示板に表示され、個人総合の金メダルが加藤に確定した。少し頬を紅潮させた加藤は、周囲に促され、恥ずかしそうに観客に手を振った。

——実は王者ボロニンは加藤さんが目撃した失敗の後にももう一度、同じように把手に足をひっかけてしまいました。どう思われますか？



上段左から右へ、メキシコシティ、ミュンヘン、モントリオール。下段左から右へ、モントリオール、ミュンヘン、モントリオール

加藤 人間ですからいくら練習したといっても、成功する確約はないです。僕には落下のような大きな失敗がなく、少し演技が止まることはあったと思いますが、たまたま（金メダルの）お鉢が回ってきたということだけです。あの大会は僕にとつて海外デビュー戦で、まだ22歳の子どもでしたから、怖いもの知らずで、ラッキーだったのだと思います。

——ラッキーなビギナーズ・ラックだったと?!

しかし、その4年後のミュンヘン大会でも、またまたソ連の新鋭ニコライ・アンドリアノフに逆転勝ちしています。

加藤 アンドリアノフ君は前半は快調で首位を走っていました。逆に後半の自由演技に入る前に緊張したのでしょうか。実は選手村に入村してすぐ、食堂で彼を見つけたので私が先に手を振って挨拶したら、彼は口の中に入っている食べ物を噛みながら、びっくりしたように立ち上がった。普通な

ら口の中のを飲み込んで挨拶するでしょう。彼は初めてのオリンピックだったので、さすがに緊張しているなと感じました。そうしたら試合でも競技が進行するにつれて勝利を意識したのか、硬くなったようで、最終種目の床でフロアの外に飛び出しました。

——加藤さんは最後の鉄棒で『後方抱え込み二回宙返り』を決めて、9・75を出し、個人総合で二連覇を果たしました。メキシコシティーとの違いは、何かありましたか？

加藤 戦い方を変えたんです。以前は自分の目の前にある板の目や天井のライトを数えて、気を紛らわせていたのですが、ミュンヘンでは周囲の人と普通に会話して、順番が来たら集中するようにしたのです。普通にしてみようということです。

——いずれにしても極限の重圧に強かったのはなぜでしょうか？

加藤 失敗する練習をしていたことだと思います。

普通は良いことばかり、成功する練習ばかりをしているのです。でも機械じゃなくて人間なので、失敗は必ずあるのです。だから失敗する練習を繰り返していました。どこでどうなったら失敗するのか？ を体に分かせることが大切なのです。

——失敗の練習？ 1956年コルチナ・ダンペッツォ五輪のアルペンスキートの回転競技で銀メダルを獲得した猪谷千春さんも同じことを言っていました。転倒を直前に察知できることで、重心を立て直す能力を磨いたのだと……。

加藤 そういえば全日本選手権に出場するとき、入部したばかりの1年生に付いてもらったことがあります。彼は試合前の選手の練習を見て「凄いなあ、加藤さんより上手い人がこんなにいるのですね」と驚嘆していました（笑）。皆が良いところばかりやっていたからです。

——それに引き換え、加藤さんは普段の練習では失敗ばかり、コロコロ、あるいはゴロゴロばかり

していた訳ですか？

加藤 試合は6種目もあるし、技の数も多い。2時間近くかかります。気持ちがずーっと一定でいられるかというところではない。乱れが生じてくるのです。

——3度目のモントリオール大会は団体では金メダルを獲得しましたが、個人総合は残念ながら銀メダルでした。

加藤 大学が都内から茨城県の筑波に移って、行ってみたら途中の道路は整備されていないし、体育館には体操の器具が届いてなくて慌てました。筑波大学での当時の身分は事務職で、その後、大学の先生になるならもっと勉強しなくてはいいないとも思っていました。だからモントリオール大会の選考会も中途半端な気持ちでした。そうこうするうちに“個人総合で二連覇した者しか三連覇はできない”という声が自分の中に聞こえてきて立ち向かいました。モントリオール大会が近づ

くにつれて、自分の中では簡単には勝てないと実感していたのに、ソ連のアンドリアノフ君に負けたときの悔しきは特別でした。表彰台は真ん中が勝者、向かって左が2位、右が3位と決まっています。国旗掲揚のとき、3位の方向に国旗が上がるので、そちらを向くと、段差があるので、自分の目の前にアンドレアノフ君のお尻があるんですよ。悔しくて悔しくて、それから2、3カ月は駄目でした。

——どうして立ち直ったのですか？

加藤 ある日、ふと自分が勝ったときも右にも左にも選手がいたのだということに気づいたのです……気づいて良かったです。もし個人総合で三連覇なんてしていたら、もうどうにもならない鼻持ちならない人間になっていたと思うんです。負けたということを知ったことは、自分には計り知れないほど、大きいことでした。あのとてつもない悔しさの中で、何かを初めて掴^{つか}んだんです。

パートⅡ 美の秘策

取材・構成
波多野圭吾

僕はFIG（国際体操連盟）の技術委員を20年やっただけですけど、その間、競技を見る人へのわかりやすさを重視して色々とルールが変わりました。

例えば、規定演技の廃止。規定演技というのは、全選手が事前に定められている課題をこなして、その出来栄えを競争するものです。ルールで規定されている技をどう上手くさばるか。選手からすればこれが本当に面白かったんですけど、残念ながら無くなってしまうました。

それから、採点制度も大きく変わりました。体操競技は、採点規則をもとに「選手がどの技を行ったのか」、「その技をどのように行ったか」という2点で判定・評価がなされます。元々、これらの観点は

対等な価値を持っていましたが、現在は少し様子が違います。

2006年までは10点満点の採点で、いかに技を美しく見せるかがポイントでした。今は技の難しさ・組み合わせ・構成を示す「Dスコア」と、技の美しさや正確性など演技の出来栄えを示す「Eスコア」の合計で点数が算出されます。Eスコアは10点満点からの減点法ですから、10点以上の点数はつきません。それに対してDスコアは上限がないので、難度価値の高い技を多くやった方が勝つ可能性が高くなります。つまり、体操の特性ともいえる「どの技を行ったか」、「技をどのように行ったか」という2つの判定・評価の観点は、もう対等な関係にない

のです。

少し言い方がきついかもしれませんが、ルールをわかりやすくするうえで犠牲になったのが、美の感覚、つまり「美感」だったのだと思います。「生け贄になった」と言ってもいいでしょう。私としてはそんな感じがあります。

「美」という感覚は、物差しのような全世界共通の基準がなく、個人差や地域差が大きいものです。時代や文化背景、生活習慣、宗教やイデオロギーなど様々な要素が絡んできますが、それでも人類的に「美」という共通の概念が存在しています。

それは体操競技においても同じです。演技の出来栄えを判定する5名のE審判員は、各自の美感で採点を行います。採点規則では一定の基準を外れたEスコアは規則に沿って協議・指導されて、基準内におさまったEスコアのうち、最高点と最低点を除いたものが平均化されます。それくらい、「美」の感覚を数値化するのは難しいということです。

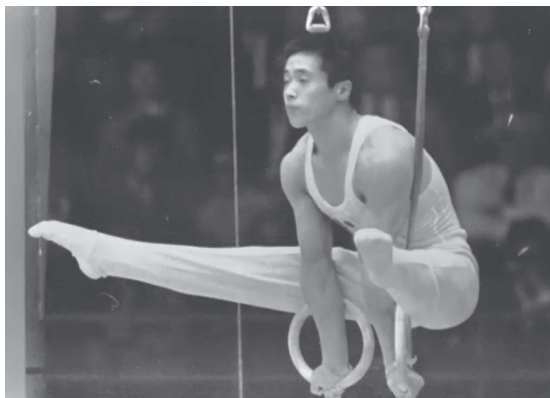
脳と動作

そもそも、体操には採点時の減点量が幅が持たされているものがあります。ゆかの宙返りだと、高さの不足によって0・1もしくは0・3の減点がされますが、高さについての具体的な基準は明記されていません。この判定も各審判員の主観に委ねられています。今は選手の演技をAIで採点する動きもあります。美に絶対的な基準がないうえに減点量に幅が認められるとなると、採点パターンが複雑になって処理しきれなくなるそうです。

ところで、この運動の「美」という感覚は、どのように発生するのでしょうか。ヴィクトリア・フォン・ヴァイツゼッカーという医師は、『ゲシュタルトクライス (DER GESTALTKREIS)』という著書のなかで、「生命あるものは、生命それ自体が主体となつて動いている」と述べています。

例えば、「お母さん、私の代わりに箸の使い方を

覚えてよ！」って、これ、何だかおかしいですよね？
「私が行なう運動を私の代わりに動いてください」って
いうのは、日本語になつていませんよね？ 自分
の運動というのは、たとえ稚拙であつても、見よう見
まねで自分の身体を動かしながら、つまり動きの体
験をしながら覚えていくことになります。自分自身



つり輪の演技
写真①上：メキシコシティ五輪 下：ミュンヘン五輪

が動くこと、それを個人として体
験することは絶対に欠かせないこ
とで、その体験があるから学習が
展開されていくのです。

運動学では、勘やコツといった
動くときの感覚を「動感」と呼ん
でいます。人が動く姿は、外から
見ることはできますが、動感とは頭
の中を解剖しても見えません。視
覚では捉えることができないけれ
ど、本人にはわかります。動感
は自分の体験と記憶のすべてに関わ
るものですから、自分が体を動かした時の動きその
ものと、周りの状況は全部記憶されていきます。

だから、自身の動きの断片的な記憶は、思い出
せないものも含めれば無尽蔵にあるといえます。物
事の判断、例えば「美」や「醜」といった感覚や意
識についても同じです。これらの感覚は生まれた時

から備わっているものではありませんから、何らかの動きや体験が関わって成立するものだと考えられる。

これはつまり、「動き」が脳の育成を援助しているということです。人の運動は、脳からの指示をきっかけに始まるとされています。でも、生まれる前の赤ちゃんは脳が未発達なのに母親の胎内で手足を動かしていますよね？ これは、脳より先に「動き」があるとしなければ、説明がつかないんです。脳の機能的には遺伝子とか色々あるのかもしれないけど、脳を活性化させ、様々な動きや感覚を養っていくためには、運動が欠かせません。

美と反射

人の運動というのは面白いもので、同じ人物が同じ動きをやっても、毎回どこかに違いがあります。物体が動く時はそっくり同じこともあるんですけど、人間の場合はそうじゃないんです。

ここに私が体操をしている2枚の写真があります（写真①）。ひとつは1968年メキシコシティー五輪のもので、22歳の時です。もう1枚はその4年後、1972年のミュンヘン五輪のもので、25歳です。これ、どうですか。皆さんはどちらも同じに見えますか？ どっちの演技が美しいと思います？

僕はね、ミュンヘンの時の写真は今すぐにでも隠したいんですよ（笑）。僕的美感に反するんです。ぱつと見ではわからないと思いますが、ミュンヘンの写真はお尻が下がっているように見えませんか？ それと背中がグラツとしていて、足の位置も下がっている。演技中はそのまでの違いを感じなかったけど、4年間でこれだけの違いが出てきています。本当に締めりのない演技で見せるのが恥ずかしいんですけど、同じ動きは二度とできないという何を何よりもわかりやすく示していると思います。

人間の身体は、「屈曲反射」といって膝と腰を曲

げて小さくなると、足首も一緒に曲がります。かかえ込みの宙返りは身体を曲げて小さくすることで回転を加速させますが、その際、屈曲反射で足首も勝手に曲がつてしまいます。こうした反射があることはかなり昔から体操の世界で知られていましたが、誰もそんなことは気にせず、かかえ込みの際に足首が曲がることはずっと許容されてきました。

よく日本人は「下駄を履く」と言いますが、体操の演技中に足首が曲がつているのは、汚くて見ていられないんですよ。だから、私はかかえ込みの宙返りをする際、意図的に足首を伸ばしていました。誰も見ていないかもしれないけど、反射理論のすべてが体操に当てはまるわけじゃないと思って、足首を伸ばすことにこだわっていたんです。

今から3代前のFIG会長だったアルトゥール・ガンダーさんは、自身が退職する時に関係者へ向けて感謝状を送っています。すごく驚いたんですけど、その感謝状の中に足首を伸ばして演技する私の写真

が載っています（写真②）。おそらく、ガンダーさんは私が屈曲反射を打開することに挑戦していると気づいていたのだと思います。

工夫と共感

その感謝状には、足首を曲げ、手首を反らして演技する、当時の女子チャンピオン、リュドミラ・ツリシチェワ氏の写真も載っていました。その演技は、手足をピンと伸ばす「きちんとした体操」の姿勢を崩しているように見えますが、実はものすごく工夫された動きでした。クラシックな動きとは対照的に、コミカルだけれど上品さを感じさせる演技だったのです。

ガンダー元会長は、私やツリシチェワ氏が考える「美しさ」に共感してくれていたのだと思います。他にそんな人がいたかどうかはわかりませんが、少なくとも元会長は見てくれていたのです。

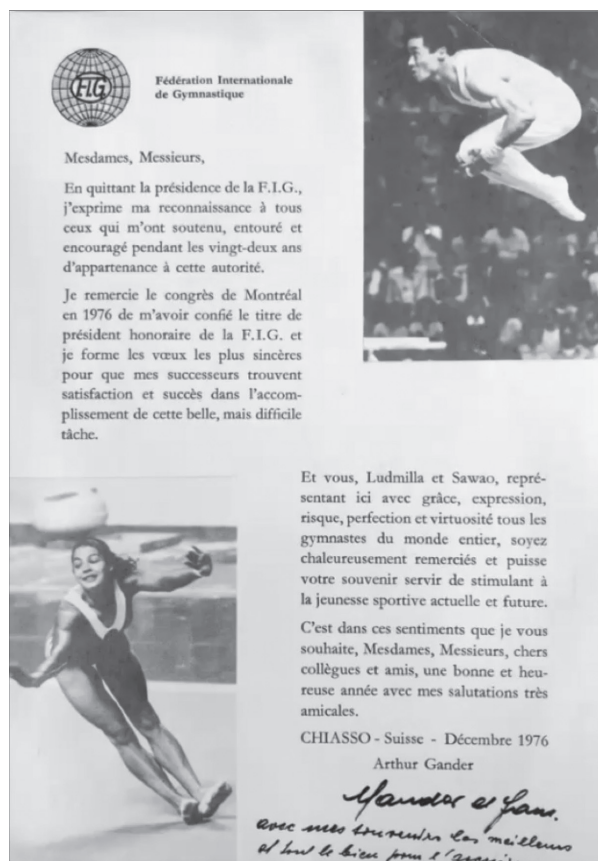
美醜と体験

現在は新型コロナウイルスの影響で様々な活動が制限されていますが、政治、経済、社会、科学、スポーツなど、どの分野も人が動くということについてその発生や展開の機構、意味、価値を原点から真剣に考えることが少なくなっている気がします。

人間の体が動くということ
は、生きていることと同等です。人間の動きは意図しなくても動感、つまり運動の感覚を必ず経由しています。脳活動の大半は、動くことで活性化・育成されるのです。

また、動感とは脳が支配する
ほとんどすべての領域と連携

がとれています。運動だけでなく「美」や「醜」といった感覚についても同じで、自分が動くという体験なしでは成立し得ない。外形的、視覚的、知識的に理解しても、それだけで判別できるようにはならないんです。



写真②ガンダー氏がFIG会長退任時に送った感謝状

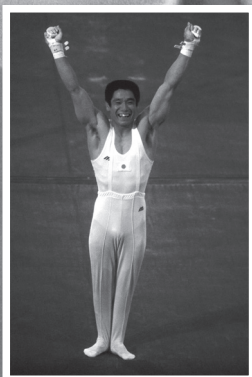
美とスポーツ

消えた電光掲示板

—— 具志堅幸司

取材構成

阿部雄輔



具志堅 幸司 (ぐしけん・こうじ)

1956(昭和31)年11月20日、大阪市大正区生まれ。大正中央中で体操競技を始める。清風高3年時の高校総体で個人総合、団体総合優勝。日体大2年時に当時史上最年少で代表強化選手入り。79年世界選手権(団体銀)鞍馬銅メダル。80年モスクワ五輪代表。81年世界選手権(団体銀)個人総合銅、平行棒金、床銅メダル。83年世界選手権(団体銅)個人総合銀、つり輪金メダル。84年ロス五輪(団体銅)個人総合金、つり輪金、跳馬銀、鉄棒銅メダル。85年世界選手権(団体4位)平行棒銅メダル。全日本選手権個人総合優勝4回(80～82年、84年)。2005年、紫綬褒章受章、現日体大学長、日本体操協会副会長

アメリカのビドマー選手と2013年アントワープ世界選手権大会にて撮影。ビドマー選手はロス五輪個人総合銀メダル獲得、最後まで勝敗は分からなかった良きライバル。

——具志堅さんは加藤澤男さんの体操を見て体操を始めたということですが、1968年メキシコシティ、72年ミュンヘンとオリンピック男子個人総合2大会連続金メダルの加藤澤男さんの体操は、美しい体操の代名詞として今も語り継がれています。

具志堅 体操競技が生まれたのはドイツですが、ドイツ語で体操競技を「Kunst Turnen（クンスト・トゥルネン）」と言います。「Kunst」とは「芸術」のことで、直訳すれば「芸術体操」。つまり体操競技には美しさがないとダメなんです。

——体操はサーカスでもなく軽業的なものでもなく、芸術だということですね。加藤澤男さんの体操を初めてご覧になったのはいつですか？

具志堅 小学校6年生の10月です。メキシコシティオリンピックをテレビで見て、カッコいい、俺もやってみたいと思いました。それでどこか体操ができるところはないかと探したら、私が住んでいた大阪市大正区の大正中央中学に体操競技部があること

が分かって、中学に入學して体操を始めたんです。

私の両親は二人とも沖繩出身ですが、大正区は「リトル沖繩」といわれるほど沖繩出身者が多いんです。中学の2年上に上江洲茂春さんというやはり沖繩出身の先輩がいて、この先輩がうまかったんです。私が中学1年で向こうが3年生ですからもう神様みたいに見えました。加藤澤男選手とダブって見えた。金魚の糞みたいに先輩にくっついて歩いて、先輩の真似をすれば体操がうまくなるんじゃないかと思って歩き方、しゃべり方、服装も何から何まで先輩の真似をしてました。清風高校、日本体育大学と進んだのも、上江洲先輩のあとを追っていったわけです。

週7日体操がやりたかった

中学の体操部の顧問の先生は美術の先生で、美しく体操をしないと教えられました。きれいにやると褒めてくれた。褒められると嬉しくなって、もつ

と美しくやろう、丁寧をやろうというのが中学校3年間の体操でした。学校の練習は週3日でしたが、私は週7日体操がやりたくて、近くの学校に行ったり、母校となった清風高校へも足を運んで練習させてもらったり、何て言うか出稽古の3年間でしたね。

——先生方には、体操のセンスはあんまりないと言われたとか。

具志堅 清風高校の山口彦則先生にも日体大の阿部和雄先生にも言われました。「素質はない」と。

——ショックじゃなかったですか。

具志堅 いえいえ、その後があるんです。「努力する素質がある」と。これが嬉しかったです。実際私は技を覚えるのが遅いんです。自分でもどうしてこんなにどん臭いかなと思うほどです。けど、できるようになったら失敗しないという良さもありました。最後に追いつき追い越せば良いんだ、それが自分のスタイルだから、と自分に言い聞かせてました

ね。

——大学時代には大怪我也経験されましたね。

具志堅 大学3年、4年と立て続けです。3年生の時に左足首腓骨の複雑骨折。足の裏がひっくり返って天井を向いてました。4年生の時は右アキレス腱断裂です。その時に清風高校の担任の先生、桑原昭吉先生から励ましの手紙をいただいたんです。日本史の先生で、高校を卒業する時に『生きがいの探求』『生きがいの創造』（ともに出口日出磨著）という2冊の本をいただいた、心の先生ですね。僕を支えてくれた恩人です。先生からの手紙を何度も読んでいるうちにもう一回やってみようと思いました。不思議なことに怪我をしたことよってパワーアップしたんです。体操も変わってきた。不思議ですね。もうダメだと思ったけどそうじゃなかった。逆だったですね。

——1978年に日体大を卒業され、80年モスクワオリンピックの日本代表に選ばれました。ところが

ボイコットになった。

具志堅 順天堂大学で代表合宿をしていたところへ日本体操協会の専務理事がやってきて、ボイコット決定を知らされました。大学を卒業して2年目。大学の研究員という立場で競技を続けていました。大きな怪我を乗り越えて、オリンピックに行くことだけが唯一の望み、唯一の光でした。

今も残るモスクワへの思い

僕は4年後のロサンゼルスに出られたからまだ救われましたが女子の加納弥生選手（体操）や男子でも北川淳一選手（同）、余吾元博選手（同）などモスクワが最初で最後という選手もいます。ボイコット決定の前にレスリングの高田裕司さんが涙で参加を訴えた選手たちの決起集会がありましたね。山下泰裕（柔道）やモスクワ代表選手やコーチが参加しましたが、合宿中の僕らには案内がなくて集会があることも知りませんでした。合宿をサボってでも訴

えたかったという思いは今もあります。自分の意思とはまったく関係のないところで決められて、何の抵抗もできない。腹が立つというよりもただただ空しい思いで合宿から帰ってきました。しばらくは体操の練習をせずにマワシ着けて相撲取ったり、レスリング会場に行ったり。

——格闘技をやるうと？

具志堅 いやいや。いろいろなスポーツをやりたいかったです。バレーボールやったり重量挙げやったり、そういう時間に費やした。2カ月ぐらい体操から遠ざかりました。当時体操には「規定演技」というのがあって、これはオリンピックごとに変わるんです。ロサンゼルスオリンピックまでの「規定演技」が発表されたのを機会にぼちぼち体育館に戻ろうかと。もともと最終的にはやめるつもりはなかったんです。けど、ちよつと時間を置きたかった。

——ロサンゼルスの個人総合金メダルは逆転の勝利でした。

具志堅 規定はトップだったんです。ところが団体戦の自由演技の最後の種目、あん馬で尻もちをついた。落馬した。考えられないミスです。5位まで落ちて、代わってトップに立ったアメリカのピーター・ビドマー選手と0・175の差がついた。

——0・175というのは小さそうですね。周りにも差でした。

具志堅 10・0が飛び交う中ですからね。周りにもう逆転不可能だつて言っていましたね。

——しかしご本人はミスの後でも強気なコメントを残されています。

具志堅 「失敗するためにロスまで来たわけじゃありません。今まで16年間の総決算です。自分を信じてやってみたいと思います。大丈夫ですよ」と言つてニコツと笑ったんです。

モスクワがなくなつて最初で最後のオリンピックです。ですから、そう簡単にあきらめるわけにいかないという心境になっていました。年齢も28歳で、体力的

には24歳のモスクワの方がいましたが、試合の読みとか精神的なコントロールの力は28歳のロスの方が上でした。言葉が引つ張つていくつてことも体験していましたから、「もうダメだ」とか、「あかん」という言葉じゃなくて、「まだ行ける」つて自分に言い聞かせるための言葉を言つた。あの時、「ダメですわねえ」とか「頑張つても3番ぐらいですわねえ」と言つてたら優勝してないですよ。

あとはイメージコントロールですね。試合の日、会場に向かうバスの中で自分が優勝している映像が浮かびました。日の丸見て、君が代歌つてる。涙流して。そんな甘いもんじゃないうと思つてあと2度リピートしても同じ光景が浮かびました。

電光掲示板の故障が生んだ採点の綾

——5位からスタートした男子個人総合決勝ですが、途中で電光掲示板が壊れたそうですね。

具志堅 そう。あん馬から入つてつり輪、3種目目

の跳馬が10・0で3位に上がったんですね。そこで電光掲示板が壊れた。足し算ができなかったのか順番が出てこなくなっただけです。4種目目平行棒9・9、5種目目鉄棒9・95。実際はこれで逆転していったんですが平行棒終わっても順位出ないし、鉄棒終わっても出ないんです。私の最終種目が床運動、ビドマーが平行棒とともに9・9。演技が終わったら掲示板が正常に回復した。それで私が0・025の差で優勝です。

もし電光掲示板が正常に動いて数字が出ていたら、アメリカの審判は私の床に9・9つけていないですよ。ビドマーを優勝させたいですから、僕がいくら良い演技をしても9・8しか出さないです。彼が9・8つければ私は結果的に2番。9・9つけてくれたおかげで僕は優勝したんです。

—— スイスの審判は10・0出していますね。

具志堅 あれ、着地動いています。一瞬で戻したから分からなかったのかもしれないけど、ビデオ見たら

動いています。10点じゃないです。スイスの審判は着地した瞬間にパツと自分のノートか何かに目が行って、見えなかったんじゃないかなあ。あれが9・9だったら負けです。

—— ロサンゼルスは東側諸国が参加しなかったので審判の質が低かったということでしょうか？

具志堅 と言うよりもね、あの頃は選手がルールを超えてたんです。今、体操の技の難度評価は「A」から「I」までありますが、当時は「C」までしかなくて、その上が「ウルトラC」ですが、いくら難しい技を成功させても得点は「C」と一緒でした。だから審判が着地を止めるところに重点を置いて採点するんだったら、下りる技は難しいC難度でも易しいC難度でも得点は同じじゃないか、得点が同じならたとえびねらずに伸身で下りれば良いんじゃないかという判断があるわけです。それまでの採点で審判の傾向は分かりますから、その傾向に対して自分で演技構成を変えていく。選手がルールを完全

に超えていた時代ですね。

——演技を終えた後の笑顔が印象的でした。笑顔の練習もしていたそうですね。

具志堅 舞台をよく見に行きました。演歌を見たりミュージカルを見たり、藤田まことさんの舞台にも行きました。良い舞台ではお客さんが自然に拍手するんですよ。私も観衆から自然に拍手をもらえるような体操したいな。そういう思いがあって、休みのたんびに能に行ったり歌舞伎を見たり、いろんなシヨウを見て表現の仕方を学びましたね。

美術の先生に教わった美しい倒立

——具志堅さんが体操に求めたものは何でしょう？

具志堅 美しさですね。きれいに体操したい。美しい表現をしたい。そこはずっと変わりませんでした。基本は逆立ち、倒立です。きれいな倒立をする人はきれいな体操ができる。僕の基本は中学校の3年間で美術の先生から教わった逆立ちじゃないです

かね。爪先から手まで、できるだけ一本の線の状態になる。腹筋が弱ければお腹が引つ込むし、背筋が弱ければ反ってしまいます。一本のラインに乗れるかどうか、それが美しさにつながっていく。あとは膝の線ですね。膝がスツと伸びているかどうか。一番は肩、次は膝。この2つが美しさを追求するところの部位です。

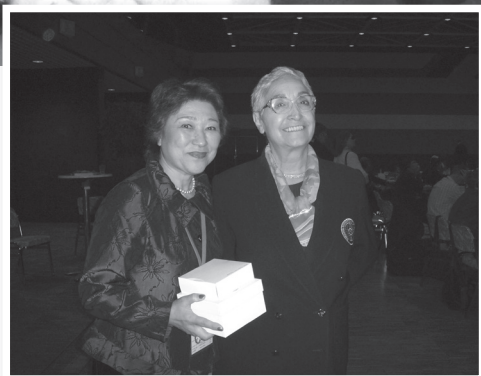
——加藤澤男さんは失敗する練習を積んだとおっしゃっていました。

具志堅 そうですね、どんな選手でも失敗する練習をしなければ成功は導けないです。僕は「もののちゅう中を知る」という言葉で表現しています。大きなパワー、スピードで演技してみる。失敗した。次はエネルギーをセーブしてやってみる。ちよつとセーブし過ぎた。じゃあ次はもつとアップしてみようという繰り返しの中で自分のやるべきポイントが見えてくるんですね。大を知り、小を知らないと「ものの中」を知ることはいけません。

美とスポーツ

世界で『最優秀審判賞』 を獲得

——石崎朔子 取材構成 長田渚左



右はエグレ・アブルチーニ(元FIG新体操委員長)

石崎朔子(いしざき さくこ)

1947(昭和22)年9月23日、青森県青森市出身。70年日本女子体育大学体育学部卒業。75年国際審判資格取得。06年最優秀審判員賞受賞。13年日本女子体育大学名誉教授。現在学校法人二階堂学園理事長。元日本体操協会副会長。日本新体操連盟副会長。

——採点競技として、新体操にはどんな特徴がありますか？

石崎 まず芸術的要素を持ったスポーツの採点は、表現力や音楽との一体感が大切ですが、新体操は手具を扱う点の特徴として挙げられます。例えば体操競技の器具の平行棒や鉄棒、平均台は動きません。その動かないものに対して自分の体を変化させます。一方、新体操は自分の体を動かし、手具も動かす……という二重の難しさがあります。

——なるほど。体操の審判は現在9人ですが、新体操の審判構成はどうですか？

石崎 年度によつて異なりますが、難度を見る人、芸術と実施を見る人など、現在は難度の審判が4人、芸術を採点する人が2人、実施を採点する人が4人の10人です。ただ採点の最高点と最低点をカットして平均点を出すのは体操競技も新体操も同じです。

——5種目ですよね？

石崎 はい。ロープ、フープ、ボール、クラブ、リボンの5種目です。最近はロープはジュニアの大会で行われ、シニアでは行われてはいません。団体と個人の二つがあり、個人は5種目のうち国際体操連盟(FIG)が指定した4種目で演技が行われます。

夢と経験

——青森県の出身で、ご自身も高校時代から新体操の選手でしたが、国際審判員になろうと思ったのはなぜですか？

石崎 大学(日本女子体育大学)でも新体操を続け、その後は指導者になりました。そして、ロッテルダム(オランダ)で開催された1973年の世界選手権に、教え子を日本代表として出場させることができたことで、一つの夢がかないました。しかし、大会本番では観客席で見守ることしか許されず、コーチとして選手を最後まで指導することができませんでした。若くて、経験が乏しいということは、こん

なことになるのか?! と悔しくて、自分が一流にならなくては、選手も一流にすることができないと思い、国際審判の資格を取るためにスペインに行きました。

受験と受賞

—— 75年に国際審判の資格を取得されました。この資格は一度取得すれば生涯有効というものではないのですね？

石崎 ルールの変更が細かくあるので、更新するには4年ごとオリンピックサイクルで受験しなくてはなりません。

—— 2006年には世界中の審判の中から『最優秀審判賞』を日本人で初めて受賞されました。どういう背景があったのでしょうか？

石崎 当時、FIGの新体操の委員長はエグレ・アブルチーニ（イタリア）という方で、彼女は採点競技が万人に認められるためには、審判が信頼されな

くてはならないと、公明性に力を注ぎました。国際大会に派遣する優秀な審判を選ぶために、さらに新たな試験が課せられたのです。試験では実際の大会の映像をその場で抽選で選び、演技の申告書を正しく採点、誤申告を順次に修正するものでした。次から次へと映像が流され、朝から夕方まで続けました。終わった後も、あらゆるメモが回収されて、翌日の受験者に漏れないように警戒態勢で行われて、とてもストレスフルでした（笑）。その結果、私は難度を見るテクニカル部門で合格するのに最優秀審判賞を受賞しました。

—— 採点競技の審判員は、とかく自国の選手に甘い採点をしたり、逆にライバル国の選手には辛い点を付けたたりすることも、少なくないようですが……。

石崎 それをエグレさんは徹底して公明正大でクリーンな採点にしようと努力されたのです。北京五輪の前年の07年の世界選手権の実施で、何人かの審判が同じ点数を出したことがありました。怒ったエ

グレさんは警告の赤紙をそれぞれの机の上にパンパンと音を立てて置きました。その審判たちは北京五輪には呼ばれませんでした。

——そういうポリシーのある委員長のとくに、日本人で初の最優秀審判に選ばれたのは名誉ですね。国際審判として世界で活動する上での難しさはありますか？

石崎 そうですね。80年代に海外の試合に参加するようになって驚いたのは、ヨーロッパは人種が入り乱れていますから、その審判が背負っているものが、採点に表れることがあります。例えばスウェーデン代表の審判なのに、実はチェコ人だったり……。また、スイスのナショナルコーチはブルガリア人だったりと……。

——それは偏った採点が出そうです（笑）。国対国の力関係などもリアルに感じましたか？

石崎 04年のアテネ五輪のときに抽選でギリシャ人の審判と2人で組むことになりました。自国の応援

や圧力が強烈でした。ちょっと怖いくらいの声援が体育館に響くわけです。その時はエグレさんに励まされましたね。「イシザキさんの方が審判のキャリアが豊富なことから、（ギリシャ人の審判に）決して引きずられないように正しい採点を心掛けてね。負けないで！」と……。

精度とゾーフロレム”

——主張が必要だったこともありましたが？

石崎 ベラルーシの選手が主要な難度を二つも外してしまい、それに対して私は当然ながら低い点数を出しました。すると、その選手のコーチが飛んできて「何でこんな低い点を出すのか！」と抗議してきました。私は見た通りのことを説明した上で「でも次の試合で精度を上げて素晴らしい演技をしたら、それに見合った点数をきちんと出しますよ」ときっぱりと言いました。また、ある大会ではロシアの選手、ボールが落下し、場外に出た演技に私は8・

9点を出しましたが、隣の審判の採点を見たら、ミスした演技に9・2点という得点が出ていてびっくりしました。手具を落として、場外ですから、何でそんな点数が出るのか?!……「あり得ないでしょう?」と、その審判に言ったら両手を広げて「ノープロブレム（問題ないわ）ここはロシアだし」って答えました。過去にはこういうこともありました。

不満と納得

——へえ、びっくりですね。そのような審判員もいる中で公正な採点を貫き続けることは大変ですね?

石崎 そうですね。主張すべきことをはっきり言っても、別に仲間外れや意地悪をされることはなかったですね。そのベラルーシのコーチだつて選手の失敗は分かっていました。ただ低い点数に不満があったので、次がいい演技をすれば審判もきちんと点数を出します……と伝えることで、納得してもらえま

した。その後、そのコーチとは信頼関係が出来とても仲良くなつて、今でも交流があります。日本女子体育大学にコーチを派遣してくれたりしています。

——つまり人対人のとのぶつかり合いは、ブレないことが大切ということですね。

石崎 その通りですね。審判をしているときは、自分のジャッジで選手を泣かせるようなことには絶対にならないように……と思つて公明性に目を光らせていますけど、それ以外の日常では審判同士のコミュニケーションが重要なんです。一部屋に二人で二週間くらい一緒だったりもしましたけど、スウェーデン、チェコ、南アフリカ、中国……どこの国の人も楽しく交流できました。朝ご飯と一緒に食べて、練習を見に行つて……世界中に友人ができました。これは人生の財産です。当時は、大学で授業を終えた後、夜10時50分発のエルフランスでヨーロッパに飛んで、早朝に到着した日の夕方には審判会議に出席して、翌日から試合の審判を週末ま

でして、急いで日本に帰国してウィークデーに大学で授業して、また週末にヨーロッパに行つてました。他の国の審判から「何でそんなに行つたり来たりしているの？ クレイジー！」とあきれられていました（笑）。

公明性と正当評価

——どんなお気持ちで、身を粉にしてヨーロッパと日本を往復して、中立的なジャッジを続けていたのですか？

石崎 難度がきちんと入つて、失敗もない演技が正しく評価されるようになるまで、日本でもかなりの時間が掛かりました。

大学の名前や派閥など関係なく、選手がそこまで積み上げてきたものを正當に評価する。それ以上でも、それ以下でもない。すつきりとしたジャッジです。選手が本当に泣くようなジャッジだけはしたくない……そう思つてやってきました。これからもそ

うあつて欲しいと願っています。



美とス。ホーツ

信念で見る技術と表現

——平松純子 取材・構成 山内亮治



平松純子 (ひらまつ・じゅんこ)

旧姓上野。1942 (昭和17) 年11月1日生まれ、兵庫県西宮市出身。小学校4年生でスケートを始める。全日本選手権を56年から4連覇を含め5度優勝、五輪には60年スコーパー大会、64年インスブルック大会と二度出場。引退後は審判の道へ、71年に国際審判員資格を取得し、五輪、世界選手権などのジャッジやレフェリー、技術役員 (TC) を務める。2002年に国際スケート連盟 (ISU) 技術委員に選出。ISU理事、日本オリンピック委員会 (JOC) 理事なども歴任。ISU名誉委員



トリノ五輪 (2006年) で、ペア競技の技術役員を務めた。

——フィギュアスケート選手として全日本選手権を5度制し、五輪にも2度出場。輝かしい現役生活の後は審判の道へ進みましたが、なぜですか？

平松 私たちの時代には、アイスショーへの参加、またはプロの指導者か審判員になること、この3つが引退後の主な選択肢だったんです。

ご存知かもしれませんが、私の母（故上野衣子さん）は戦況悪化により中止となった1940年札幌五輪のフィギュアスケート代表候補の1人でした。五輪出場が叶わなかったこともあってか、その後競技には審判員として積極的に関わり、1972年の札幌大会ではアシスタントレフェリーを務めました。そうした母の姿を見ましたから、自分も第二の人生では審判の道へ進もうと決意しました。

——お母様からの影響が大きかったようですね。

平松 もう一つ、大きなきっかけがありました。大学3年時の夏休み、カナダのサマースクールに自費で3か月半参加しました。150人ほどの北米

各地から集まった選手と練習を積んだのですが、そこで面白い取り組みを目にします。フィギュアスケートには「バジテスト」という世界共通の昇級試験があり、カナダでは16歳になると現役選手でもその試験の審判ができる制度があったんです。審判にはルールの熟知が必須ですし、審判経験を通じてスケーターが学ぶことも多いので、すごい取り組みだと思いましたね。戦後育ちの第1期生のスケーターとして、この海外経験を通し、語学の必要性はもとより多くの学びや気づきがありました。そうした選手時代の貴重な経験を日本のフィギュア界に還元しないともったいない気がしたので、審判員としてスケート連盟に関わることを選びました。

ジャッジひとりの差で金銀

——1971年に国際審判の資格を取得されています。当時は今と比べ競技や採点法が随分違ったようですね。

平松 その頃の競技は、コンパルソリーフィギュア

(CF) という規定課題とフリースケーティング (FS) の2種類。CFは課題ごとに難易度係数があり、小数点第1位を用い6点満点で採点。FSは「技術点」と「芸術点」をそれぞれ6点満点で採点し、両方の点数を合計し順位を付けていました。

そして、1973年にはショートプログラム (SP) が導入。1990年の世界選手権を最後にCFは全面廃止され、競技の内容は変遷をたどります。ただ、6点満点の相対採点法は1892年の国際スケート連盟 (ISU) の発足以来100年以上も変わらず。同じ採点法で審判が続けることに限界を感じていました。

—— 限界ですか。

平松 私が審判員だった頃でさえ、選手の技術の向上は目覚ましく、表現もさらに繊細で個性的、緻密なものに変わっていきました。選手の技量をより正しく、適切な方法で評価できる採点法が求められて

いるのではないかという気がしていました。

—— 採点法に限界を感じる一方、目の前の試合での審判には責任をもつて臨まなければなりません。審判員の頃、何を大切にされてきましたか？

平松 現役時代に自分自身が審判されてきたわけですから、審判員という立場になった時、一番大事にしたのはルールに則つて「公平」に演技をジャッジすることでした。人間である以上、演技の評価が分かれるのは仕方ないかもしれませんが、それでも、誰かを勝たせたい、どのスケーターが好き、そんな偏見は一切持ちませんでした。

—— ただ、国際大会となると難しい場面があったのではないかと……。

平松 初めての五輪審判員を務めたのは1988年のカルガリー大会でしたが、この時、開催国カナダのブライアン・オーサーと米国のブライアン・ボイタノによる「ブライアン対決」に立ち会いました。今も語り継がれる、五輪男子シングルの名勝負。

当時は順位点が用いられており、CFとSPを終えた時点で、最後のFSでトップに立った方が金メダルをつかむという大接戦。オーサーの場合、地元の期待を一身に受けていましたから、金を獲ればまさに英雄。金か銀かでは、その後の人生が大きく変わると思いましたし、こちらまで息が詰まりそうでした。それでも冷静に、とにかくどちらが良い演技をしたか、そう信念をもって私はボイタノが上だと判断しました。結果、9人のジャッジのうち、5人がボイタノを、4人がオーサーを支持し、わずかに人の差でボイタノの金メダルが決まりました。

フィギュア採点ゆえの難しさ

——平松さんは2004年シーズンから現在も続く新採点法「ISUジャッジングシステム」の導入に深く関わったそうですね。

平松 2年の移行期間を経て、「技術点」と「演技構成点」でより細分化した採点になりました。

これは、2002年のソルトレークシティー五輪のペア競技で不正採点が発覚したことがきっかけとされています。当時は米紙「ニューヨーク・タイムズ」でも大きく報じられるなど、フィギュア界を揺るがす大スキャンダルとみられました。しかし、実際は数年前より作業部会が立ち上がり、新たな採点法が模索されていたんです。その新採点法の導入にあたり、ISUの技術委員としてセミナーの準備や教材作りを進め、審判員への指導を担当しました。

——個人によって美や表現への価値観は違うので、世界のような国から集まる審判員を指導するための教材となると、ちよつと想像が付きません……。

平松 新採点法の技術点と演技構成点のうち、前者はジャンプ・スピン・ステップの難易度と質を判断するものなので、基準作りは比較的容易でした。

問題は後者です。これはスケーティング技術・要素のつなぎ・演技力・構成・音楽との調和と解釈の5項目を0・25刻みの10点満点で採点するものな

のですが、「表現」に大きく関わる部分であるため、どう基準を設けるかが非常に難しい。そこで、振付師や演出家、音楽の専門家などを招き様々な角度から知見を求めました。彼らの英知を結集しなければ、とてもじゃないですが新採点法を指導するための教材は完成しませんでした。

——15年以上も続く新採点法に何か課題は？

平松 演技構成点の各項目の点数が正確に評価されているか疑問で、それぞれの点差があまり開かない場合もあります。昔も今も信念をもって点数を付けるというジャッジの姿勢に変わりはないので、判定の厳しさをもつと見せるべきだと思います。また、個人的に強く感じている課題がもう一つあり、それは高度な技に演技構成点の点数が引つ張られてしまうことです。例えば、4回転ジャンプを多く飛んだら、表現力が十分でなくても、その選手に技術力があるという考えに囚われてしまい、演技構成点の点数のベースが上がってしまうようです。一方、技術

力が十分でなくても表現力で高い評価を受けるべき選手もいます。

——採点にテクノロジーを導入することについてはどうお考えですか？

平松 これに関して、フィギュアスケートの場合には大きな壁となる要素があります。音楽です。演技全体に関わる大変重要な要素なので、そこをテクノロジーが果たしてどう評価できるのか……。

選手によっては選曲がしつくりこなければ、前のシーズンのものに戻し、変更を加えたり、さらに磨きをかけたりする人もいます。選手がそこまで綿密に努力しているのですから、審判する側もその努力についていくことが求められているはずです。フィギュアスケートの採点の難しさは、技術と表現、二つを総合して評価する必要があること。そのため、芸術分野への知識の探求も欠かすわけにはいきません。

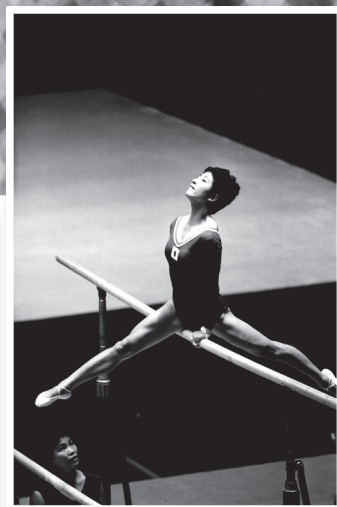
美とスポーツ

きりつとした姿勢が

美人の源

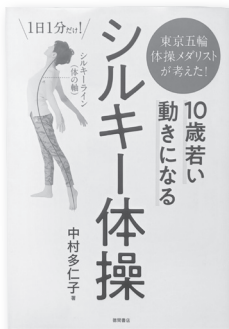
——中村多仁子

取材・構成 長田渚左



中村 多仁子（なかむらたにこ）

1943（昭和18）年3月23日、新潟県三条市生まれ。元オリンピック体操女子日本代表。東海大学名誉教授。選手として数々の大会に出場、1962年ブラハ世界選手権団体3位。64年東京オリンピック団体3位。68年メキシコシティー大会団体4位。著書に『スポーツは果実』



©PHOTO KISHIMOTO

——2019年秋に健康体操本『シルキー体操』（徳間書店）を出版されました。当時76歳のご自身がモデルになってお手本を示しているのには驚きました。

中村 ふふふ、そうですかね。巷に体操やトレーニングの本はあふれていますが、筋力アップを目的とするパワー系がほとんどです。そうではなくて、日常の中でしっかりと美しい体のラインをキープするためのコツを伝えたかったのです。

——人は年齢を重ねると体力が落ちて、体のあちこちに痛みも出てきます。つい「もう年だから」と言い訳しがちになります。

中村 そう、それがすごく残念でしょう。自分が自分のことを諦めたら、どんどん坂を転げ落ちてゆくだけです。少し頑張れば何歳になってもすーつと自然に動けるし、気分よく過ごすことができます。それが一番なんです。

——ご自身も実体験があるのですか。

中村 はい。現役を引退して、大学生を指導しているときに、ふと鏡を見たら背中を丸めた、だらしない姿勢の女が映っていました。それが私自身だったので、エーッとびっくりしたのです。そのことがきっかけで自分の立ち姿を矯正する体操を模索していくことになりました。

——五輪に二度も出場された体操選手です。年を取っても背筋がピンと伸びたイメージがあるのですか。

中村 オリンピックに出場したというと、皆さん頑強な体だと思うのですが、私は生まれつき股関節が浅くて脱臼しやすく、現役時代は故障が多かったです。70歳を目前にして人工骨を入れる手術もしました。でも年を取ることに抗うのではなく、受け入れて、その時々の花を咲かせる……アンチ・エイジングではなく、ウエルカム・エイジングですよ。

——素晴らしい発想です。コロナ禍で家にいる時間も長いので、自分に目を向けるチャンスですか？

中村 まあ、チャンスは言い過ぎでも（笑）、自分の体を見つめ直す良いきっかけにしてほしいのです。体の軸となる「シルキーライン」絹糸が通っているような線を意識することが、この体操の基本です。

——「シルキーライン」という単語は初めて聞きました。

中村 体の真ん中の縦軸である正中線せいちゅうせんをイメージしてほしくて「シルキーライン」という呼び方を考えました。最初は分かりにくいかもしれませんが、家の中で自分が大きく写る窓や鏡の前に立つて、腕を伸ばし、足先を伸ばしてみてください。

——どうも家の中にいる時間が長いと、体を大きく伸ばすことをあまりしなくなって、手を伸ばす、足を伸ばすだけで、忘れかけていた自分の体の可能性を思い出します。

中村 そうです。誰の体でもない自分の体と向かい合うことが大切なんです。頭でうんうん考えると

いった理屈ではなく、すーっと手を広げ、胸を広げて体操をしてほしいのです。

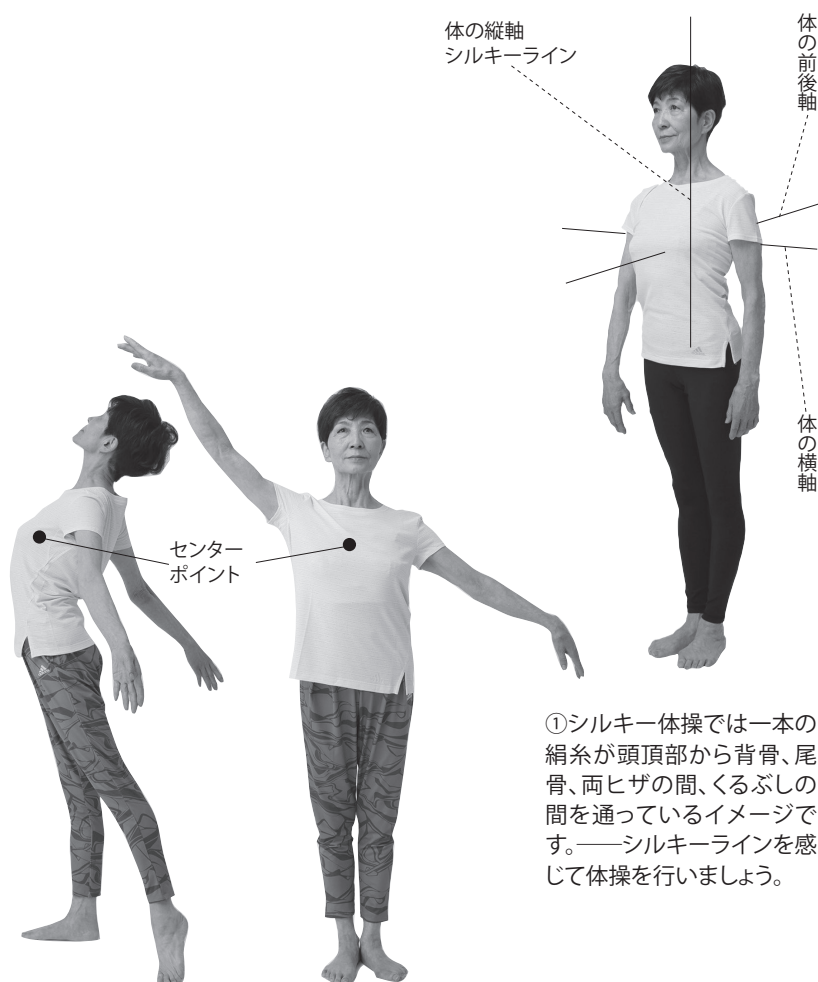
——ゼイゼイと息が上がるまで体を動かすのが運動だと思っている多くの人にとって、シルキー体操の体の動かし方は革命的だと思いますが…。

中村 人は年齢を重ねると筋肉量が減っていきま
す。それに抗うのではなく、シルキーラインを意識して日常生活を送る。筋肉に頼らず、無理のないように体を動かす方が運動効率がよく、年齢に応じたシェイプアップ効果も高くなります。

——実は私自身がシルキーラインを意識してせっせと体操したら、体のゆがみが矯正されたのか、悩んでいた目眩めまいがなくなりました。

中村 その人本来の体のラインが大切なのです。何歳になっても自分の足で歩く、移動をすつすつとできると、それが元気の源になります。

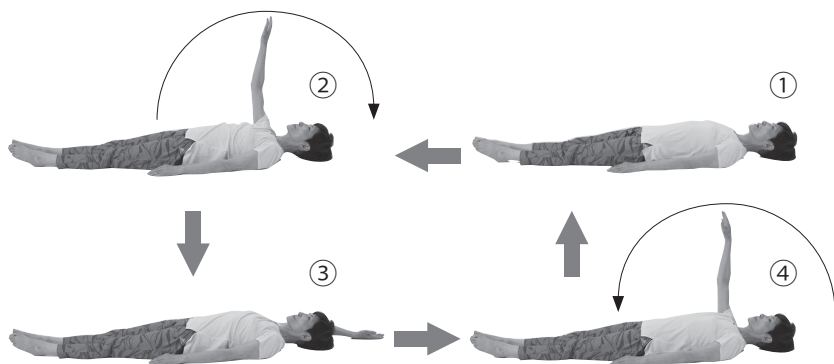
シルキー体操の基本



①シルキー体操では一本の絹糸が頭頂部から背骨、尾骨、両ヒザの間、くるぶしの間を通っているイメージです。——シルキーラインを感じて体操を行いましょう。

②胸の中心点である「センターポイント」は体すべての動きを支える支点。腕は肩から、脚はつけ根から始まっていると思いがちですが、腕も脚もセンターポイントから始まっているとイメージして下さい。

腕の上げ下げ



胸のセンターポイントから片腕を上げてゆく。ゆっくり息を吸いながら、手の甲が床に着くまで動かす。着いたら、ゆっくり息を吐きながら手のひらが床に着く位置に戻る。

脇腹・太もも裏体操



①開脚して座る。一方の脚を曲げ、伸ばしている脚の内ももに足裏をもってゆく。膝を曲げた方の腕を上へ上げ、シルキーラインを意識する。②伸ばしている脚のつま先へ向かってゆっくり息を吐きながら、シルキーラインを意識して側屈してゆく。脇腹、太ももの裏まで心地よく伸びていることを感じる。

(『シルキー体操』より)

美とス・ポーツ

忘れ得ぬ東京の名花

——ベラ・チャスラフスカ

取材構成 長田渚左



ベラ・チャスラフスカ (ベラ・チャスラフスカ)

1942年5月3日チェコスロバキア (現チェコ) プラハに生まれる。1964年東京オリンピックで金3、銀2のメダルを獲得。優美な演技と美貌で「東京の恋人」「オリンピックの名花」と称えられた。しかし4年後のメキシコシティー大会には出場すらも危ぶまれた。大会直前にチェコスロバキアの民主化運動に反対するロシアを中心とするワルシャワ条約機構の軍事介入が起きた。民主化路線を支持する『二千語宣言』に署名している彼女の安否が気づかれた。だが大会に現れた彼女は祖国の屈辱を跳ね返すように金4個を含む6個ものメダルを獲得して英雄となった。その後、署名撤回を迫る国からの迫害で20年以上自由を奪われた。2010年日本より旭日中綬章をおくられた。2016年8月30日74歳で永眠



1964年の東京オリンピックには「美の象徴」と言われた女がいた。体操競技のベラ・チャスラフスカ（チェコスロバキア）である。あれから半世紀以上も経つのに、彼女に魅了された人々は、今も「比類なき美しさだった」とため息をつく。

当時23歳だった元日本テレビアナウンサーの徳光和夫氏は「映画女優のエリザベス・テーラー、オーディリー・ヘップバーン、カトリーヌ・ドヌーブに匹敵する美貌でした。しかも、ベラはレオタード姿で惜しげもなく大胆な演技をしてハラハラさせた。だからこそ日本中が魅了されたのだと思います」と後に語っている。

当時、大学1年で大会期間中に国立競技場の売店でアルバイトをしていた元早稲田大学理事の宮内孝知氏は、実際にチャスラフスカを目撃している。

「誰かのお供で東京体育館に行ったら、彼女がストレッチをしていた。悪いと思ってチラリと見ただけでしたが、輝くようにきれいだと思います。周囲

にいる他の選手がかすんでいました。豊満で大人の女性という感じでした。日本中が圧倒されましたね。多分、日本人がテレビでじっと見つめた最初の外国の大人の女性だったのだと思います」

その美しさは同性の女性にはどう受けとめられていたのだろうか？ 同じ体操で東京大会に出場していた中村多仁子氏は、こう振り返った。

「ソ連にラチニナというチャスラフスカのライバルがいました。彼女も群を抜いて上手い選手でした。人の胸に矢を射るような演技で唸らせる。でも観客は矢を射られると、その上手さに後ずさりしてしまいます。一方、チャスラフスカは『どうぞ、いらつしやい』という感じで、人を包み込むような演技をする。観客も『もつと見たい』と身を乗り出す感じでした。日本人はその演技に魅了されただけではなく、心地よくなったのだと思います」

圧倒的な人気者となった彼女は『東京の名花』『東京の恋人』と呼ばれ、大会期間中はどこに行っても

人の山に囲まれた。

ウルトラCと武士道

体操選手としての実力も本物だった。個人総合、跳馬、平均台と3つの金メダルを獲得した。

実は段違い平行棒でも金メダル候補の筆頭だった。上のバーで水平に1回転して下のバーに飛び移るウルトラCの離れ技があったからだ。しかし、本番では水平に全身を回転させた直後、バーをつかみそこねて落下した。

満員の東京体育館に悲鳴が響いた。その瞬間を至近距離で見ていた中村多仁子氏は自身も全身がこわばったという。「ベラさんもこんな失敗をしてしまうのか、と驚きました。でも、その直後に私はもっと驚いたのです」

落下の後、演技を再開したチャスラフスカが、失敗した大技に再度チャレンジしたからだ。普通は落下したら、その次の演技から再開する。ところが彼

女は失敗した大技にもう一度挑戦して、完璧に成功させたのだ。難度の高い技だから、再び失敗する可能性も少なくはない。しかも、落下した時点で金メダルの可能性も消えていた。にもかかわらず、彼女は心を乱すこともなく、離れ技を平然と決めてみせた。

悲鳴のあと静まり返っていた会場は、彼女の心意気に大歓声で答えた。

後年、その経緯についてチャスラフスカ本人に直接尋ねた。

「……失敗に落胆しなかったわけではありません。でも私はどうしてもお客さんが期待していたウルトラCを見せたかった。私の演技をこんなに一生懸命に見てくれている観客がいる。だから同じ技にもう一度挑戦したのです。もうメダルなんて関係なく、ただ観客に喜んでもらうために。それが日本人の心に響いたのではないのでしょうか。後にその演技は武士道精神にも重なると言われました」

家宝と一世一代

実際にこの大観衆の中にいた一人の青年が、この演技に心を揺さぶられてある行動にでる。「彼女のために何かしなければ……」と心に決め、車のハンドルを握った。福島県北西部の喜多方の実家を目指したのである。静かな山里にたどり着いたときには、深夜0時を回っていた。そして旧家の床の間に飾られていた家宝の日本刀を掴んだ。起きてきた兄弟夫婦と押し問答となったが、ともかく日本刀をチャスラフスカに届けたい一心で逃げるように実家を後にした。一睡もせずに車を走らせて、東京体育館そばの日本青年館に開設されていた五輪プレスセンターに直行。そこで青年は一世一代の芝居を打つ。

「私はチャスラフスカさんの友人です。お渡ししたい物があるので、朝の練習後、こちらに寄るように伝えてもらえませんか」

その後の経緯は省くことにするが、確かに長くて

重い包みをチャスラフスカに渡すことに成功した。彼女はその日の夜にも種目別の決勝があったので、包みの中身は確認せずに、大会が終了して帰国するときに、手荷物として航空機内に持ち込んだ。

「座席の上の荷台に入れて大切に持ち帰りました。贈り物はよく見ていなかったのですが、不思議なことに、くれた人の覚悟のようなものを感じたのです。何かとても魂のこもった大切なものをいただいたという実感がありました」

4年後の1968年メキシコシティーオリンピックでは、彼女への期待が世界中で膨らんでいた。同年1月、チェコスロバキアでは改革派のスロバキア人、アレクサンデル・ドゥプチェクが第一書記の座についた。「春が1月に始まった」と言われ、彼は『人間の顔をした社会主義』をスローガンに掲げ、国民の圧倒的な支持を得て、独自の自由改革路線を歩み出した。いわゆる『プラハの春』と呼ばれた政

府の改革路線に賛同して後押しする『二千語宣言』が発表されると、チャスラフスカは迷わず署名した。

ところが同じ社会主義国の盟主ソ連にとって、『二千語宣言』とともに急速に高まってゆくチェコスロバキアの自由化への流れは放置できないものだった。メキシコシティー大会を2カ月後に控えた8月20日、ソ連軍を中心としたワルシャワ条約機構軍が20数万の部隊でチェコスロバキアへ侵攻したのだ。『二千語宣言』に署名した人は逃げてください。町中にアナウンスが流された。チャスラフスカは山の中に身を潜めた。

称賛と迫害

そしてオリンピック開幕のわずか12日前、彼女は何とかメキシコシティーに到着した。練習不足とコンディション不良という大きなハンディを抱えていたにもかかわらず、大会では信じ難い結果を残した。個人総合、段違い平行棒、床、跳馬で4つの金メダ

ルを獲得。平均台、団体総合の銀を含めて一人で6つのメダルを手にしたのだ。チャスラフスカの名前が世界中に轟いた。

凱旋帰国した彼女はチェコスロバキアの英雄として称賛された。しかし、ほどなく体操界から追放されることになる。体制派の共産党政権にとって、国民の絶大な人気と支持を誇る彼女の信条や言動が、危機感を抱かせるものになっていたからだ。彼女は政府から『二千語宣言』の署名撤回を執ように迫られた。拒み続けるうちに「チェコの黒いひつじ」とレッテルを貼られ、まるで罪人のように扱われるようになった。尋問は40回以上にも及んだという。

体操界からの追放にとどまらず、いつさいの仕事奪われた。生活に困窮した彼女は偽名を使い、変装して掃除婦となつて糊口ここうをしのいだ。不遇の時代は26歳から20年以上も続いた。やがて1989年、東欧で起きた民主化へのうねりが、チェコスロバキアにも達した。世に言う『ビロード革命』により共

産主義政権が崩壊。チャスラフスカは民主化の象徴として復権した。

20年以上も続いた弾圧と迫害に、どうして耐えられたのか？ 私の疑問に彼女はこう答えた。

「私は自分自身を裏切ることができなかっただけ」

多くの著名人は投獄や迫害を恐れて署名を撤回し、何事もなかったように好条件下で暮らしていた。しかし、彼女は信念を変えた人たちのことを決して非難しなかった。

「非難などしないし、できない。本当にすさまじい圧力でしたから。仕方なく家族や友人のために撤回せざるをえなかった人たちの事情も分かります。家族を持ちながら撤回しないでいられた私は幸運だったのかもしれない」

不遇の時代に届いた日本からの手紙には、どんなにか励まされたという。辛いときには日本から持ち帰った日本刀を見て、ぐっと耐えたとも語った。

「私は何か行動するとき、日本人だったらどうする

か？ とよく考えました。日本人に顔向けできないことだけはすまいと……。だって私はサムライの命でもある刀を持っているのです。だから一度言ったことは変えないし、ましてや生き方を変えるような寝覚めの悪いことはしない」

彼女の美しい演技と、若き美貌が人々の心を虜とりこにした。そして、年齢を重ねた彼女の生きざまも、また何と美しいことか。あの離れ技を再び演じた時のように、彼女の人生もまた信念が揺らぐことはなかった。

2度目の東京オリンピックで日本人との再会を楽しむにしていたベラ・チャスラフスカは、2016年8月30日、チェコの首都プラハの病院で74年の生涯を閉じた。

ベラ・チャスラフスカの展覧会が予定されている。
2021年4月6日(火)5月30日(日)、東京・新宿の日
本オリンピックミュージアム1階。入場料五百円

「」内は『桜色の魂』（集英社刊行）より引用

夢劇場『馬』

No.23



身震い

昨年、歌手のMISIAさんがテレビ番組のロケ中に落馬して大ケガをした。馬が突然走りだし、振り落とされたそう。

実は私も同じような経験をしたことがある。当時、テレビの競馬中継の司会をしていた縁で、あるファッショ誌から「馬に乗っている姿を撮影したい」と依頼がきた。あまり気乗りしなかったが、よく晴れた日に地方の乗馬クラブに出向いた。厩舎から馬を出し、鞍を乗せて、コーディネーターの説明を聞きながら馬にまたがった。すると1秒もたたず、馬は、何を思ったか、走りだしてしまつたのだ。

えーっ！ スタッフも他の客も、クモの子を散らすように逃げた。私自身、乗つたものが勝手に

動いてしまうのは初めての経験だった。操縦法を教わる前の出来事だったので、ともかく手綱を握り締め、馬に話しかけた。「何が気に障つたのかわりませんが、落ちていくください。冷静に、冷静にお願いします……」。彼は知らん顔でずんずん前に進んでゆく。行き先も、目的も分からない。坂を上がつて下り、走る走る。

どのくらい走つたか、やがて体を回してターン。今度は今来た道を全力で戻り始めた。負けてたまるか！ 両脚の内側にあらん限りの力を入れて、馬体を挟んだ。走りのテンポに合わせて、馬上で必死に弾んでリズムを取つたが、失神寸前だった。やがて彼は自分の厩舎へと戻つた。大きく脚を回して、私は地面に下りた。恐怖で腰がガクガクと震えたままだった。やがてカメラマンがニコニコ笑いながら走つてきた。「いやあ、大迫力、いい写真が撮れたよお」コロナ禍の巣ごもりで、家の掃除をしていた時に、その写真が出た。それから何十年もたつのに、また身震いした。



バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011

埼玉県新座市野火止8-16-32

株式会社東美物流

『スポーツゴジラ』係

送料値上りのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけると幸いです。

次の夏号第51号は2021年6月

初旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館で読めます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫

●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館
●港区芝・東京都人権プラザ図書館

【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左

（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）

／昇二（びあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッポン放送取締役相談役）

／永井憲一（法政大学名誉教授）

／山口香（筑波大学教授）

／山口良治（京都工芸大学院高校ラグビー部総監督）

【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部 太田章研究室 気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®

2021年3月5日発行

第1巻第50号

無断転載を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

平塚貴大・山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 図書印刷株式会社

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401